4.2　相対価格──モノとモノの交換条件

このような物々交換の世界において，私達には2つの選択肢がある．ひとつは，水田で働き，賃金として得た米の一部を消費し，残りを交換マーケットのようなところ（以後は「市場」と呼ぶ）でテレビと交換してテレビを楽しむというものである．もうひとつは，工場で働いて賃金としてテレビを受け取り，一部を米と交換するというものである．ここで，水田と工場のどちらで働くのが得だろうか．あるいは，私達はどちらで働くかをどのように決めるのか．このとき，**米1単位がテレビ何台と交換されるか**が重要となってくる．

4人家族を例に考えてみよう．すでに見たように，自国では4人分の労働で米が1単位できるが，同じ労働でテレビは2台生産できる．家族でテレビ工場で働くと，2台のテレビをつくることができる．一方，水田で働くと1単位の米をつくることができるが，もしこの米が2台より多くのテレビと交換してもらえるとしたら，当然水田で働くことを選ぶだろう．なぜなら，同じ4人分の労働でも，直接つくると2台のテレビにしかならないのに，敢えて米をつくってそれをテレビと交換するという間接的な方法をとれば，2台より多くのテレビを入手することができるのだから．

これに対して，1単位の米が2台より少ないテレビとしか交換してもらえないとしたら，むしろ自分達でつくったほうがよい（＝工場で働いたほうがよい）ことになる．

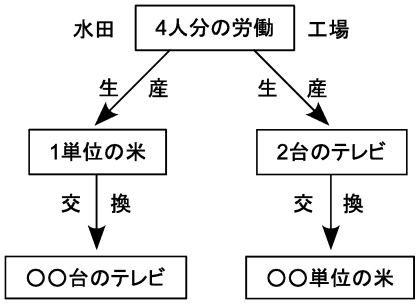

図 8: 水田と工場のどちらで働くか

このように，水田と工場のどちらで働くかを決定するには，市場で米1単位がテレビ何台と交換されているのかが重要である．これは，いわば「テレビで測った米の価値」と言うこともできる．したがって，この米とテレビの交換条件を一種の「価格」と考え，特に「(米の）相対価格」と呼ぶ．ところで，我々が普段目にする「200円」とか「50ドル」といった価格は，財・サービスがどれだけの「お金」と交換されるか，すなわち「お金で測った財・サービスの価値」と考えることができる．このことから，相対価格と区別するために,「貨幣価格」「名目価格」と呼ぶこともある．

（米の）相対価格が上昇するということは，どのようなことを意味するであろうか．たとえば，相対価格が2から3に上昇したとしよう．これは，それまで1単位の米が2台のテレビと交換されていたのに，3台のテレビと交換されるようになったということである．すなわち，米の評価はテレビに対して上昇したことになる．反対に，2台のテレビで1単位の米が入手できていたものが，3台差し出さないと入手できないようになったので，テレビの評価は低下したことになる．このように，米の相対価格の上昇は，米の評価の上昇と同時にテレビの評価の**低下**を意味している．

4.3　相対価格はどう決まるのか（貿易前）

上では，市場で提示されている相対価格の水準によって人々の行動（＝どちらで働くか）が異なる可能性に触れた．ここでは，相対価格のどのような水準に対して，人々がどのように反応するかを考える．その後に，そこから遡って，相対価格がどのような水準に「落ち着く」かを考える．まず，貿易を行っていない状態から考えよう．

すでに見たように，自国においては相対価格が「2」より大きいか小さいかが重要である．そこで，例として相対価格が 3 の場合と 1 の場合を取り出して考えてみよう．

相対価格が 3 の場合

相対価格が 3 であるということは，1 単位の米が 3 台のテレビと交換してもらえるということである．テレビの側から見れば，1 台のテレビは 1/3 単位の米と交換される，したがって 2 台のテレビは 2/3 単位の米と交換されるということである．従って，水田あるいは工場で働く場合の結果は図 9 のようになる．

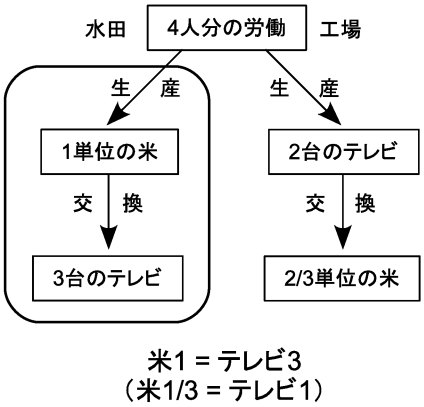

図 9: 米の相対価格が 3 の場合

直接工場でテレビをつくると 2 台しか入手できないが，同じ労働で米 1 単位をつくると，3 という相対価格の下では 3 台のテレビと交換することができる．したがって，テレビは工場で働いて入手するより，むしろ水田で働いて「交換」して入手したほうがよい．一方，米については，水田でつくれば 1 単位になるが，テレビをつくって交換すると 2/3 単位にしかならない．したがって，水田で働いて入手したほうがよい．

以上より，3 という相対価格の下では，誰もテレビ工場で働く誘因を持たない．米が欲しければ水田に行って働くし，テレビが欲しい場合でも水田で米を作って交換によって入手しようとするのである．したがって，皆が水田に行って米をつくろうとすることになる．この結果は，2 より大きいすべての相対価格に当てはまる．

さて，注意深い人はここでひとつの矛盾に気付いただろう．すなわち，皆が米をつくろうとするが，その一部はテレビを手に入れるためである．つまり，テレビも見たいにもかかわらず，皆が米をつくってしまうのである．当然，交換市場には米保持者ばかりが殺到してテレビ保持者がゼロになってしまうので，米保持者はもう少しテレビに有利な条件でも交換に応じるようになる．たとえば,「米 1 単位についてテレビ 2.5 台でもいいですよ」というような具合に．こうして，結局のところ相対価格は当初の 3 から下がり始めるのである．

相対価格が 1 の場合

相対価格が 1 であるということは，1 単位の米が 1 台のテレビと交換してもらえるということである．水田あるいは工場で働く場合の結果は図 10 のようになる．

1 という相対価格では，1 単位の米は 1 台のテレビにしか交換されない．したがって，工場に働きにいって 2 台つくったほうがよい．一方，2 台のテレビは 2 単位の米に交換されるが，水田に行っても 1 単位しかつくれないので，米についてはテレビと交換に入手したほうがよい．以上より，誰も水田で働く誘因を持たず，交換市場ではテレビばかりが供給されることになる．圧倒的に米が足りないた

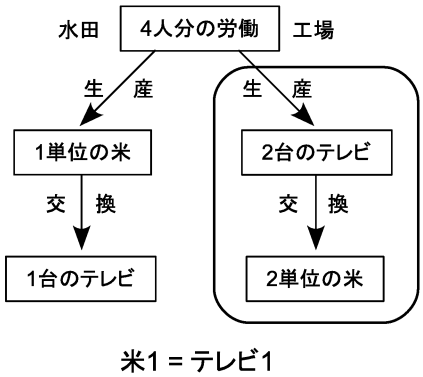

図 10: 米の相対価格が 1 の場合

め，テレビをつくっている人は「米 1 単位に対してテレビ 1.5 台でもよい」というように，米にとってより有利な交換条件を提示するようになる．こうして，米の相対価格は 1 から上昇し始める．

なお，以上の結果は，2 より小さい全ての相対価格に当てはまることを確認されたい．

相対価格が 2 の場合

ここまで，相対価格が 2 より大きいときは低下し始め，2 より小さいときには上昇しはじめることを見た．では，ちょうど 2 に等しいときはどうだろうか．

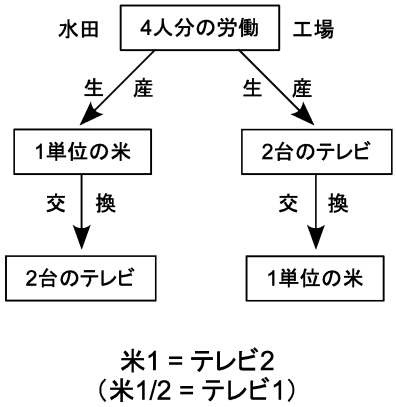

図 11: 米の相対価格が 2 の場合

図 11 からわかるように，米については，直接つくってもテレビをつくって交換しても入手できる量は変わらない．テレビについても，直接つくっても米をつくって交換しても同じである．したがって，私達にとって水田で働くか工場で働くかはもはや問題ではない．どちらでもよいのである．労働者が一方に集中してしまうことはないので，交換市場では米とテレビの両方が供給され，過不足は生じない．したがって，米の価値が上昇したりテレビの価値が低下したりする必要もない（＝相対価格は 2 から変化することはない）．

以上，3 つのケースから分かるように，相対価格が 2 より大きければ低下しはじめ，2 より小さければ上昇をはじめ，ちょうど 2 に等しくなったときにそこで「落ち着く」のである．その意味で，貿

易をしない場合の自国の相対価格は 2 に「決まる」と言ってよいだろう．

相対価格と比較生産費

ここで，相対価格が最終的に「2」に落ち着くことの意味を考えてみよう．もともと，この「2」は何だったかと言えば，それは「米 1 単位つくる労働力をテレビにまわせば **2** 台できる」という意味であった．つまり，米 1 単位にはテレビ 2 台分の労働力が必要ということである．そして，今回，米 1 単位が市場で交換されるテレビの量（＝米の相対価格）も，やはり 2 台でなければならないことがわかった．すなわち，**米 1 単位にテレビ 2 台分の労力が必要ならば，交換市場においても米 1 単位は 2 台のテレビと同等の評価を受けなければならない**，ということである．こう考えると，自国の貿易前の相対価格が比較生産費に等しい 2 に落ち着くことは，ごく自然なことと感ぜられるだろう．

外国の相対価格

自国の場合と同様に考えれば，貿易をしない場合の外国の相対価格が 0.5 になることは容易に確かめられる．

4.4　相対価格はどう決まるのか（貿易後）:「自由」貿易は世界の生産効率を改善するか

いよいよ，貿易によって相対価格がどのように変化し，両国の人々がどのように行動を変えるかを見てみよう．

自国と外国が貿易を開始すると，相対価格は両国で等しくなる．たとえば，貿易開始直後，米の相対価格が外国で 0.5，自国で 2 であったとしよう（つまり，自国のほうが米が高く評価されている）．貿易を開始すると，米・テレビをどちらの国で交換してもよいのだから，当然，外国の米保持者はもはや外国でテレビと交換しようとはせず，自国に輸出して自国のテレビ保持者と交換しようとするだろう．こうして，自国では米の供給が急増するため，もともと高かった米の相対価格は 2 から低下しはじめる．一方，外国のほうでは，交換市場に米を供給してくれる人がいなくなるため，米の相対価格は当初の 0.5 から上昇しはじめる．このプロセスは，自国における米の相対価格が外国のそれを上回る限り続く．やがて両者が等しくなったとき，米保持者にとってはどちらで交換するかに違いがなくなるため，両国の交換市場で米は供給され，相対価格はそれ以上変化しなくなる．当初外国のほうが相対価格が高ければ，全く逆のプロセスを通じて相対価格は等しくなる[3]．こうして，(関税や輸送費等の貿易障壁を考慮しなければ）貿易によって両国の労働者は共通の相対価格に直面する．

この，貿易後に成立する**世界の**相対価格を P_W と表そう．つまり，貿易後は自国でも外国でも 1 単位の米は P_W 台のテレビと交換されるということである．そして，以上の議論から，この P_W が両国の**貿易前の**相対価格の間のどこか（つまり 0.5 と 2 の間のどこか）に落ち着くということが，直観的に理解できるだろう．しかし，その背後で両国の労働者がどのように動いているのかについては，まだ明らかになっていない．以下では，前節で確認した相対価格と人々の行動の関係を用いて，世界の相対価格がどのような水準に落ち着くかと，労働者がどのように動くかを同時に考えてみよう．

自国の人々の行動は，相対価格が 2 より大きいか，2 に等しいか，あるいは 2 より小さいかによって別れた（図 12 上段）．一方，外国の人々の行動は，0.5 より大きいか，0.5 に等しいか，あるいは 0.5 より小さいかによって別れる（図 12 中段）．したがって，世界の相対価格について考えるときには，5 つの領域—(1)0.5 より小さい，(2)0.5 に等しい，(3)0.5 より大きいが 2 より小さい，(4)2 に等しい，(5)2 より大きい—に分けて考えればよい（図 12 下段）．

[3]同じことは，テレビの観点から考えてもよい．すなわち，外国では 0.5 台のテレビが 1 単位の米と交換してもらえるのに対して，自国では 2 台のテレビを差し出さなければ 1 単位の米は入手できない．当然，自国のテレビ保持者は外国の交換市場に殺到するだろう．すると，外国ではテレビの相対価格が下がり（＝米の相対価格が上がり），自国ではテレビの相対価格が上がる（＝米の相対価格が下がる）ことになる．このプロセスは，両国においてテレビの相対価格が一致するまで（＝米の相対価格が一致するまで）続く．

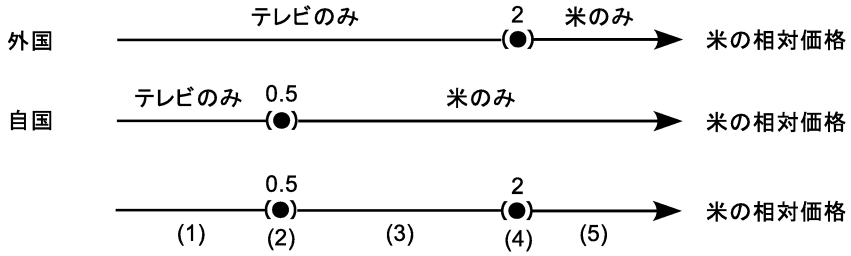

図 12: 相対価格と各国労働者の行動パターン

世界の相対価格が (1) から (5) のそれぞれにあるとき，両国の人々が水田と工場のどちらに集中するかを記入したのが，表 8 の 2・3 行目である．最後の行には，第 2・3 行を併せて，世界全体では労働者がどの産業に集中するかを記入している．

表 8: 相対価格と各国の生産パターンおよび世界の生産パターン

世界の相対価格	(1)$P_W < 0.5$	(2)$P_W = 0.5$	(3)$0.5 < P_W < 2$	(4)$P_W = 2$	(5)$2 < P_W$
自国の生産	テレビのみ			米とテレビ	米のみ
外国の生産	テレビのみ	米とテレビ	米のみ		
世界全体	テレビのみ	米とテレビ			米のみ

(1) のように世界相対価格が 0.5 より小さい場合，自国・外国ともにテレビ生産に集中してしまう．したがって，誰もテレビと交換に米を得ることができなくなり，米の相対価格は世界的に上昇していく．一方，(5) のように世界相対価格が 2 より大きくなると，今度は両国ともに米の生産に集中してしまうので，誰もテレビと交換することができなくなり，米の相対価格は低下していく．世界相対価格が $0.5 \leqq P_W \leqq 2$ の範囲にあるとき，世界全体では米とテレビの両方が生産されるため，人々はいずれの財も手にすることができ，相対価格は変化しない．したがって，両国が貿易を開始すると，世界の相対価格は貿易前の両国の相対価格の間のどこかに落ち着くと考えられる．

重要なことは，世界相対価格が $0.5 \leqq P_W \leqq 2$ に落ち着くとき，表の 2・3 行目からわかるように，自国はテレビ生産に，外国は米生産に専念しているということである．すなわち，両国は貿易を開始するだけで，自ずとそれぞれ比較優位を持つ財の生産に集中していくことになるのである．もう少し丁寧に言うと，次のようになるだろう．貿易によって自国では米の相対価格が 2 から低下していく．したがって，米をつくっていた人々は，米 1 単位と同じ労働力でテレビを 2 台つくって米に交換したほうが効率的になる．自ずと，テレビ工場へと転職をしていく．一方で外国では，貿易は米の相対価格を 0.5 から上昇させる．テレビをつくっていた人々は，同じ労働力で米をつくってテレビに交換したほうが効率的になる．いきおい，水田へと転職していくことになる．そうして，それぞれが比較優位を持つ財の生産へと労働者を集中させていくのである．くどいようだが，人々が価格を見て**個人の**損得だけで動く結果，**社会的に**効率的な状況が実現されるというところが重要なのである．

5　リカードを超えて

今回は，リカードが想定した世界の中で，貿易が私達の消費できる財の量にどのような効果を及ぼし得るかを考察してきた．しかし，これまでの分析には違和感を覚える部分もあったのではないだろうか．たとえば,「財は労働のみを用いて生産される」という設定は，多くの人が疑問を持ったかもしれない．財の生産には労働に加えて，少なくとも「機械」が必要なのではないかと．そのようなモデルから導かれる示唆には信ぴょう性がない，と感じた人もいるかもしれない．また，リカード・モデル